

## 今本博健・島田充彦両教授の御退官によせて

今本博健先生、島田充彦先生は平成 13 年 3 月 31 日をもって京都大学を停年退官されました。両先生には長年にわたり研究・教育のみならず災害軽減のための社会的活動を通して京都大学防災研究所の発展に多大のご尽力をいただきました。ここに両先生のご功勞の一端をご紹介します、所員一同心から感謝の意を表したいと思います。

今本博健先生は、昭和 36 年京都大学工学部土木工学科を卒業、同 38 年 4 月京都大学大学院工学研究科修士課程土木工学専攻を修了、同 40 年 3 月同博士課程を退学された。同年 4 月京都大学工学部講師に採用され、同 41 年 4 月同助教に昇任、同 44 年 3 月京都大学防災研究所附属宇治川水理実験所助教教授に配置換となり、同 50 年 4 月同教授に昇任、平成 8 年 5 月の防災研究所の改組後は同研究所附属災害観測実験センター教授として研究・教育にあたってこられた。平成 13 年 4 月 1 日付けをもって京都大学名誉教授となられている。

この間、今本先生は昭和 50 年 5 月より防災研究所改組までの 20 年余にわたり宇治川水理実験所長、平成 8 年の研究所改組後は災害観測実験センター長を併任され、同実験所およびセンターの管理・運営にあられた。また、平成 9 年 5 月から 2 年にわたり防災研究所長を併任されるとともに、京都大学評議員を併任、京都大学および防災研究所の管理・運営に貢献された。なお、昭和 50 年 11 月から 3 月間タイ国のアジア工科大学の客員教授に招聘され、国内のみならず国際的な視点で学生の教育・研究指導に活躍されてきた。

研究面においては、主として実験的手法により各種の流れの水理特性の解明に努められ、特に開水路流れの乱流構造については、本格的な乱流計測により、水面の影響により境界層気流の構造とは異なることを明らかにされるとともに、各種の乱れ特性量の水深方向の分布を摩擦速度および水深と関連づけて表わすなどの成果を挙げられた。これらの成果は国際水理学会アジア太平洋会議での論文賞を受賞されるなど国際的にも高く評価されている。

水理模型実験についても、多くの水理現象では流体と固体壁面間の摩擦抵抗が支配的なため、幾何学的な水平縮尺と鉛直縮尺ならびに運動学的な粗度縮尺の 3 量間の相似則を成立させることが重要であるとの理論的考察に基づいた多くの水理模型実験を行い、実験結果が現地現象と良好な相似性が成立することを検証観測で明らかにされている。

また、水害については、国内外における多くの現地調査を実施し、人的被害を防止・軽減するには早期避難の実行が有効であることを早くから強調され、自治体レベルでの防災計画の検討や住民の防災意識の向上に貢献された。都市化に伴う水害危険についても水害シミュレーションなどにより一般社会に警告している。

一方、教育面においては、工学部地球系学科や大学院工学研究科の授業を担当されるとともに、研究室でも多くの学生の研究指導を行い、社会で活躍しうる高度な研究者や技術者の育成に努められてきた。また、海外からの研究者を積極的に受け入れ、それぞれの研究活動を支援するとともに、海外での講演や講義を通じて国際的に活躍されている。

この他、日本土木学会、自然災害学会、流れの可視化学会、国際水理学会など多くの学会での諸活動に積極的に参加されるとともに、建設省や運輸省のほか、大阪府、京都府、滋賀県、大阪市、神戸市など多くの自治体や各種法人の技術委員会にも委員等として参画された。

島田充彦先生は、昭和 36 年 3 月京都大学理学部地球物理学科を卒業、同 38 年 3 月京都大学大学院理学研究科地球物理学専攻を修了された。同 48 年 1 月、“Melting of Silicate-Water Systems at High Pressures and Its

Implications to the Earth's Interior" (高圧下における珪酸塩—水系の融点とその地球内部における意味について)と題する論文により京都大学理学博士の学位を授与された。昭和38年4月京都大学理学部附属阿武山地震観測所助手に採用され、同54年理学部附属地震予知観測地域センターへ配置換、平成2年6月防災研究所附属地震予知研究センター助教授、同4年12月同教授に昇進され、平成13年3月停年退官された。

この間、島田先生は平成4年1月から同年3月まで岡山大学地球内部研究センター客員助教授を併任され、平成11年4月より退官されるまで京都大学防災研究所附属地震予知研究センター長を併任され、同センターの管理・運営にあたられた。

研究面においては、主として高温高压実験により、地球内部物性と構造に関する研究や岩石の変形・破壊・流動機構と地震発生機構の研究の分野で多くの業績を挙げられた。それらは、(1) 高压発生装置の開発・校正に関する研究、(2) 高圧下の珪酸塩—水系の融点と地球内部低速度層の成因に関する研究、(3) マントル物質の高圧下での熱物性の実験的研究 (4) 高封圧下における岩石の変形・破壊・摩擦すべり実験による地球内部の力学的性質と破壊機構に関する研究、(5) 高温高封圧下における岩石の破壊機構と地殻の強度に関する研究、(6) 高封圧下における細粒多孔質岩石の変形実験による地球内部の流動機構に関する研究などである。

これらの研究成果は国内のみならず国際的にも高く評価されている。昭和56年8—9月には京都大学70周年記念後援会海外派遣研究者としてスウェーデン国ルレオ大学岩石力学研究所などへ派遣され、同57年8月—同58年8月にはカナダ自然科学工学研究会議(NSERC)国際科学者交換事業によりアルバータ大学客員研究員として招聘され、同61年6月—8月には日本学術振興会特定国派遣研究者としてカナダ国アルバータ大学および西オタワリオ大学へ、また平成9年7月にも同特定国派遣研究者として中国科学院地球化学研究所などに派遣されている。その他地球内部物性研究の国際的調査・研究に参加されるとともに多くの国際会議に招聘され特別講演などをされている。

一方、教育面においては、大学院理学研究科地球物理学専攻において授業を担当するとともに、地震学及び地球内部物理学学科を専攻する大学院学生の教育・研究指導に当たり、多くの優秀な研究者を育成された。また、京都大学理学部(平成3年4月—同13年3月)を始め大阪大学教養部(昭和63年10月—平成6年3月)・全学共通教育機構(平成6年4月—同11年10月)、愛媛大学理学部(平成5年4月—同年10月)、岡山大学理学部(平成6年4月—平成7年3月)で非常勤講師として学生の教育に当たられた。

この他、日本地震学会、日本火山学会、日本高压力学会、日本材料学会、岩の力学連合会、米国地球物理学連合(AGU)などの国内外の学会で理事や幹事などを努められた。また、平成11—13年度には地震予知研究協議会(東京大学地震研究所)および地震予知連絡会(国土地理院)の委員を努められ、日本の地震予知研究の方向付けに貢献された。

以上のように、今本博健先生、島田充彦先生はいずれも防災学に関する研究ならびに教育におきましても多くの業績をあげられ、研究成果の社会的還元活動、防災技術の普及、国際交流などで顕著な功績を残されるとともに、大学・研究所の管理運営面におきましても多大の貢献を果たしてこられました。防災研究所は、平成8年度に5研究部門・5研究センターへの改組ならびに全国大学の共同利用研究所への移行、平成9年度には災害科学の卓越した研究拠点(COE)に認定され、目覚ましい発展を遂げてきました。今後はこれらの発展を研究活動にいかに対応させ、どのような成果を挙げるかが問われることとなります。

一方で、大学の行っている教育・研究に対して厳しい世論が存在し、大学の研究の質的充実や国民に対する説明などの取り組みを支援・促進する方策として平成12年大学評価機関が発足し、大学の研究・教育評価の試行が

すでに開始されております。さらに、国立研究機関の独立行政法人化が実施され、国立大学についても法人化が検討されています。

このように重要な時期に、深い学識と豊かな経験をお持ちの両先生が退官されますことは防災研究所にとりまして大きな痛手であり、誠に残念でございますが、残された所員一同は防災研究所の発展のためさらに奮励努力することにより両先生のご労苦に報いたいと思います。最後に、今本博健先生、島田充彦先生のご健康とご幸をお祈り申し上げますとともに新たな環境でのご活躍をご期待申し上げます。

平成13年8月

京都大学防災研究所長

入 倉 孝 次 郎